

# 論壇

## 大学院の授業に高校生

米国に留学していた時、教室の中で面白い光景を目にした。数学の大学院の授業であった。経済学の大学院であった私にとって数学の大学院の授業はかなり背伸びしたものであったが、必要であったので聴講していた。隣の席を見ると、まだ幼い顔をした学生が座っている。高校生だという。数学が得意で優秀なので、特別に大学院の測度論という数学の講義を聴講しているというのだ。

中学生でも高校生でも優秀で興味があれば高校や大学や大学院の講義にどんどん出席させるとい

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

のは、米国では当たり前前のことのようにだ。ノーベル賞を受賞するような研究者の経歴をみると、高校の時に大学の講義をとったというようなことが記してあることが少なくない。

全ての子供に英才教育をするのがよいというわけではない。ただ、一人一人の子供の能力も興味も異

### 先端教育の機会を子供たちに

なるので、その中には飛び級の上の学校の教育を受けることがあってもよい、というのが米国での流儀なのだ。

東大で35年近く教えていたが、日本で高校生が大学や大学院の授業を聴講するというのは一度も聞いたことはない。日本ではそうし

たはみ出した子供の教育には消極的なものかもしれない。ただ、より上級の科目を勉強したいという意欲を持つ子供はこの国にもいるようだ。日本も例外ではない。

私が大学に入った時、同級生の中には高校時代に大学の数学の教科書を読んでいたという東京の名門高校の卒業生が何人もいた。静

とだが、短期間のうちに大変なスピードで学力や能力を身につける人がいる。本人が興味を持ち、優れた環境が与えられれば、若い人には成長能力が備わっているということだ。こうした機会を若い人に与えることは地域の役割であるはずだ。学校の中で定められたカリキュラムをこなすだけでなく、学校の外でより進んだ知識に接する機会をつくれないうか。

### 学校では学べない知識

私の話になって申し訳ないが、高校の時、半年ぐらいい間に数学の能力が急速に伸びたと感じたことがある。当時はおおらかだったのか、高校の先生が平日的夜や週末、自宅で私塾をやっていた。私

も週に1回、何人かの友達と夜2時間ほど数学の塾に通い始めた。そこで先生が何か教えてくれるわけではない。毎回、難しい問題が並んだ問題をひたすら解くのだ。難しいとはいっても全く手が出ないわけではない。学校で教えてもらうことよりも、少しだけ難しいだけだったのだろう。ただ、それが解けると妙にうれしかったのを覚えている。こうしたことを半年ほど続けているうちに、数学に対する自信がついてきたことを覚えている。

今になって考えてみれば、私があの塾で受けたのは、ある種の英才教育であったのだ。平均的なことしか教えない学校では学べないことだからこそ、若い子供の知的好奇心を刺激したのだろう。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。